

2月・3月の予定

【事務所休日】

2月1日～4日 イスラム祝日

2月22日 イスラム新年

【会議等】

2月19日(木)JICA 総会(セミラミス・ホテル(15:30～21:00))

2月20日(金)レバノンJICA研修生同窓会主催交流会

3月11日(木)(安全対策セミナー)

【調査団】

「全国地方局環境監視能力整備計画事前調査団」1月19日～4月2日

「JICA ウズベキスタン事務所視察団」2月6日～2月16日

「節水灌漑農業普及事前評価調査団」2月15日～3月12日

「ダマスカス市水源拡張計画基本設計調査団」3月中旬

「JICA 安全対策巡回指導」

3月7日～3月11日

【専門家・ボランティアの動き】

『一時帰国・健康管理旅行』

浅井真樹 1月17日～2月19日

茶山正弘 1月28日～3月7日

伊藤康廣 1月28日～3月7日

『任国外研修』

白川裕子 1月22日～2月9日

北村知子 1月22日～2月9日

【事務所員の動き】

『事務所長会議(JICA本部)』

長澤所長 1月31日～2月6日

『調整員会議(パリ)』

大竹次長、木川調整員

3月1日～3月5日



種子公団・馬鈴薯圃場視察

活動報告

「瓢箪から駒」のネットワーク

吉谷川 泰(SV)

酪農技術：農業省畜産公団(ハマ)

11月のある日、北大山の会(北大山岳部のOB会)の会長からメールが入ってきた。後輩がシリアで旅行するので、レンタカーを世話してやってほしいとの用件である。山岳部という性格上、研究者・JICA関係者(専門家やSV)・永住者等と職種は多様であるが、南極を含め世界各地にメンバーが散らばっている団体である。口が悪くて癖の多い仲間達だが、旅先で困っている時には最善の対応をしてやるのが不文律の礼儀でもある。

まもなく、北海道大学で教授をやっている本人からも連絡がやってきた。12月中旬、アレppoのICARDA(国際乾燥地農業研究所)にいて小麦の共同研究の交渉、その後の3日間は農村地帯の調査旅行をしてみたいとの意向である。先方の研究者にもレンタカーの手配を依頼してみたが、ラマダンの影響もあってか回答がないため、対応に苦慮してのSOSである。用件は簡単至極!! 便利屋的な行動も苦にしない性分も手伝い、早速、あれやこれやと勝手な旅行計画にとりかかっていった。

専門分野は「馬鈴薯の根の発育」と聞いても、門外漢にはチンプンカンプンの話である。しかし、「アレppo・馬鈴薯」とくれば、種子公団にいる片山専門家を「お助けマン」に引っ張り出すズルイ考えが脳裏を掠めてきた。

予感は見事に的中!! だんだん事情が分かると、彼等は25年位前から面識があった間柄、それ以来直接には会っていないが、馬鈴薯研究のホームページで交流する研究者仲間

でもあった。岐阜大の助教授(小麦の遺伝子)と北大の若者(小麦の根)との3名をドロンコの小麦畑へと案内してもらった。さすがに商売である。非常に冷たい霧雨が降る中、僅かに発芽した小麦を喜々として掘り起こし、根の状態を検査しながら意見交換をしている。片方には水田のように水がたまった畑もある。根っこの発育が悪くて頭でっかちの小麦になり倒伏する危険性もあり、ICARDAからも研究を依頼された現象のようである。真剣な研究者達には、シリアの小麦の生育状況を知るには最高の季節のようで、興味津々・大満足の現地旅行になったようであった。

次いで、片山専門家の活動拠点の「馬鈴薯の培養育苗施設」を見学させてもらった。

多額の無償援助で完成したばかりの施設で、スペシャリスト同士の技術的な事項、今後の指導方法と話が進展していった。身近に日本人の研究者仲間がいらないだけに、片山専門家にとっても、良きアドバイスであり、ストレス解消をする最高の1日でなかったかと想像しながらハマへと移動した。

翌日は、広大なガウブの農業地帯を横切り、地中海を見るためにラタキアに行く計画であった。予定の峠は、積雪で交通ストップ。大きく遠回りしてラタキアの魚市場に直行。幸いにも日本人好みの「渡りガニ・車エビ・イカ」が購入できた。こうなれば、目的はほぼ完了したようなもので、荒天の地中海をさっと眺めるだけにして家路を急いだ。

峠の雪は20cm弱、茶店の前に

はシリア式雪だるま(不思議なことに痩せている)があり、観光客が記念写真を撮っている。一生懸命に雪を積んでいるトラックもある。除雪はしているが、ノルマルタイヤなので「シュワイ!!シュワイ!!(ゆっくり)」を連発しながらの峠くだりとなった。収穫物があまりにも多過ぎるため、「お助けマン?」として平川嬢(JOCV)を頼み、楽しいメの酒宴となっていた。小樽の住人で、自称、料理の達人の岩間教授にとっても、渡りガニは「山椒は小粒

でも」の最高の味。新しいニュースソースも加わり、楽しい語らいが続いていった。この続編は、任期満了で帰国した時に、仲間達でつくった自慢のログハウスで、岩間コックの手料理で、シリア談義をする予定である。もちろん、「最後のお助けマン」である平川さんは、今度は主役に大抜擢である。

私も「仲間達の情報や異業種の話」という貴重な土産をもらいました。このように、皆、「お助けマン」と、反対に「お助けられマン」の要

素を持ち合わせてないでしょうか?今回も、でしゃばった行為で発した「瓢箪から駒のネットワーク」ですが、次第に丈夫な根っここの「良きネットワーク」に成長してくれそうです。ネットワークは、単なる情報交流の便利な手段程度に位置つけるのではなく、自分流に「より広く・より深く」する努力も必要と私は考えています。これが、正味2日間の旅のエッセンスでもあったような気がしています。

(理屈っぽいかな・・・?)

話の広場

任国外旅行記(エジプト、ギリシャ)

辻 康子(JOCV 14-1)
体育: UNRWA(ダラア)

2003年12月22日から3週間、山谷智子隊員(14-1保育士)と共にエジプト・ギリシャ・レバノンに巡る任国外訓練旅行に行き参りました。エジプトではギザのピラミッド、アブシンベル神殿、アスワン、ルクソールと一通り遺跡めぐりをしました。毎日が、バクシーシを辿



ギリシャ・デルフィのタベルナにて

り、私達を騙してお金をふんだくろうとするエジプト人を相手に、洞察力と忍耐力を鍛える日々でした。ギリシャではパルナッソス山でスキーをし、日ごろ運動不足で鈍っている足腰を鍛える訓練でした。アテネでは久しぶりに、先進国の雰囲気を感じましたが、なにしろ物価が高く、「あれも欲しい、これも欲しい。」という物欲に打ち勝つための訓練と、英語力を鍛える日々でした。レバノン・ベイルートでは、お隣の国だというのに、何でも揃っているし、町はきれいだし、シリアとの違いをまざまざと見せ付けられ、シリアももっと頑張らなければ・・・と、私達JICAの担う役割を今一度再確認させられた2泊3日でした。20泊21日とても



ギザのピラミッド

言では言い尽くせない、試練の日々だったのですが、戻ってきて改めて「私たちはシリアが好きだー!!!」と胸を張って言えることを二人とも確認し、残りの半年の任期を頑張ろうと胸に誓いました。こんな短い文章ではとても私たちの珍旅行のすべてはお話できないのが残念ですが、興味のある方はぜひ一声おかけください。一杯飲みながら、私たちの本当の旅行記をお聞かせします!!

話の広場

シリア冒険記

大石 恵子
大石 銑太郎(SV)さんのご家族

「マルハバ(Hello)!」去年父がJICAの派遣試験に合格。11月には両親でシリアの首都ダマスカスに赴任しました。任期は1年間。そこで冬休みを使ってシリアに行ってきました。12月23日から約2週間。7年ぶりの海外旅行は

ほんとうにたのしかった!

滞在中には3泊4日でバンをチャーターし、シリア国内の必見スポットを観光。ダマスカス、シッドナヤ、マルーラ、タルトゥース、ラタキア、地中海、アレppo、ユーフラテス川、ラッカ、パルミラを巡って

きました。壮大な歴史と当時から続く信仰のなかで毎日の生活をおくるシリアという国を感じてきました。それはそれは雄大で、ロマンがあって、圧倒されました。キリストイエスが話したことばを今もなお使っている人たち...。シッドナヤの古い教会では、巡礼に来て癒され歩いて帰った人たちの義足や杖がいくつも置かれていました。シルクロードの主要都市となったシリアには、交易でしか手に入らないいろいろな国外でしか採れない鉱物や

贈り物がいまま遺跡のなかに残されていきました。

旅行だけでなく、滞在中に接したシリアの人たちはヨーロッパ寄りの顔、アラブ系の顔があり、それもまた歴史を感じさせました。みんながみんなマッチ棒を3本は乗せられるほどまつげが長いのは、うらやましかったです！英語は商売をしている人でも誰もが話せるわけではありませんでした。でも、どこからともなく必ずと言って良いほど英語ができる人がその場所に呼ばれ、どうにかコミュニケーションはできたのです。

そんななかでも、ふと覗いた床屋のおじさんがイスラム教のお祈りの最中だったり…。クリスマス礼拝で行った教会では、男女・家族席の区別はあったようですが、おごそかでした。想像もしなかったけれど歴史が深く、それが今なお日常生活に溶け込んでいました。思っていたより開かれていて、思っていたのと違って穏やかで協力的で親切な人た

ちが住むところがシリアでした。

キリスト教、イスラム教のいさかきもなく、自然にお互いを尊重しあい、それぞれがそれぞれの信仰を毎日大事に当たり前に行っている人たちは、とてもすてきでした。報道で知った「ジハード」とは、マイナス要素しか感じることはない言葉だったけど、アラビア語には当たり前神様への言葉が存在していて、それはそれは相手を想う要素に満ちたすてきな意味が込められていたのです。「サバー アルヘル(おはようございます)」は「良い朝(ですな)！」という意味で、それについて返す言葉「サバー アルヌール」は「光の朝(ですな)！」という意味。「キーフェック インテ(How are you?)」に答える「アルハンドリツラ」は「神様のおかげでとどこおりなく！」という意味。シリアでは危機感、緊迫感を1度も抱くことなく、攻撃的な感じも受けませんでした。行く前と行った後でイメージがこれほど変わったのは、

シリアが初めての国でした。

今回シリアについて文章にしたいと思った理由には、次のことがありました。シリアの人たちにいつでもどこでも「ウエルカム」と言われてうれしかったこと。知らないうちに偏見を抱いて中東をみていたと反省したこと。何人かのシリアの人たちと「シリアを日本の知人にお知らせする」と約束したこと。帰国してからシリアのことを聞かれても、口ではうまく表現できなかったジレンマがあったこと。何度言われてもうれしいと感じることばと、そこに込められている気持ちを誰かにお返しできるようになりたいと思う機会が、シリアでは頻繁にありました。日本で外国の人と話す機会があったら、今はまず「ウエルカム」と言おうと考えています。わたしが感じたシリアの印象がみなさまに少しでも伝わりますように…。「マッサラメ(さようなら)！」

活動報告

中間セミナー開催

加藤 泉 (トータルシステム管理)
灌漑省水資源情報センター



加藤さんとC/Pのカセムシャリダさん

シリアに「水資源情報センター」を作ろうと構想したのは、1996年のJICAシリア全国水資源調査の開始時ですから8年前のことです。実際に構想がまとまり、活動が始まったのは2002年6月ですから、約1年半前のことでした。とにかく「水資源情報センター」などは、シリアにとってまったく新しい組織ですので、当初は、センター所長も所員もまったくのピカピカの1年生で、JICA 専門家が偉そうに「水源情報をデータベース GIS システムで処理し、これをネットワークで・・・」と言ったところで、全く皆さん「完全なチンプンカンプン状態」で戸惑ったのを覚えています。センターの設立にあたっては、約50名ほどのカウンターパートが、ファルドースにある灌漑省本省やハラスタのバラダアワジ総局、またはラタキアの沿岸総局から集められたわけです

が、この中の数名は、俺たち「コンピューターに触ったこともない」といきまいていました。こんな訳ですから、昨年の最初のワークショップのタイトルは、大げさにいうと「コンピュータースイッチの入れ方」というようなものだったと記憶しています。講習会の内容は「MS WINDOWS」に始まり、「MS WORD」, 「MS EXCEL」, 「MS ACCESS」, 「EXCEL VBA」と進めていくうちに、あっという間に1年が過ぎていってしまいました。しかし、1年間で急速に上達するカウンターパートも出てきたものですから、2年目に入り、本題の「GIS, データベース, ネットワーク」などのトレーニングに突入できました。

前置きが長くなりましたが、今回紹介する水資源情報センターのセミナーは、カウンターパート達のこれまでの勉強の成果と、これまでの

カウンターパートの活動を、センター内外に紹介する目的で開催されました。

発表者はWRICシステム管理者12名、JICA 専門家4名の計17名でしたが、セミナーの目的がカウンターパートの活動の紹介でしたので、できるだけJICA 専門家は目立たず、シリアカウンターパートにスポットライトが当たるようなプログラムとしました。また、参加者はWRIC関係者のほか、農業省、国防省から合わせて65名ほどの参加者を迎え、バラダアワジ総局に今年新設されたトレーニングルームにおいて12月23日に開催されました。

まず総局長のジャミールファーフ博士の開会の挨拶に始まり、WRIC メインセンター所長のバシャーファイヤード博士のスピーチおよび伊藤チーフアドバイザーの

スピーチ、続いてシリアカウンターパートの発表がネットワーク、データベースおよびGISの順に3セッション行われました。

各セッションの間に質疑応答が行われましたが、技術的な質問に加え、農業省からの参加者からは、「我々もトレーニングに加わる手

段はないのか・・・」、また国防省など他機関からの参加者からは「WRICの具体的な活動内容がわかり有益だった・・・」などのコメントができました。最後に、主催者、いや進行役のJICA 専門家の印象を述べさせていただくと、各発表とも、思いのほか内容があり、「この1年半の間に随

分と、カウンターパートも進歩したものだ、これでようやく WRIC システム管理のスタートラインに立てた」との印象と受けました。最後に、6ヶ月後に再び同様の発表会を開くと、参加者に約束し、午後2時に閉会しました。

NEW COMER

ニューフェイス シリア上陸

新しい環境、生活、仕事、出会い



氏名：西川 洋昭

職種：検査室診断

配属先：アル・パース大学

出身県：広島県

期間：03年12月16日-05年12月15日

抱負：自覚あるプロフェッショナルと呼ばれる獣医師を一人でも多く育てていきたいと思ひます。

事務所から

読者からのお便り

昨年1月の「アハバール・カシオン」発刊と同時に電子メールによる送付を行ってききましたが、2月1日現在でOB・OG やご家族の方をはじ



いつもアハバール・カシオンを楽しみに拝読しております。この様な活動はシリア JICA のチームワークやモチベーションの高さが伺えます。特にJOCV 隊員達の活動や日常の報告はアラブ理解に役立ちますし、異なった「視点」の大切さを感じます。

今後共にアハバール・カシオンの編集・配信活動が継続されていくことを願っております。

(ヨルダン専門家)

音楽・ピアノ指導でエジプトに来ています。小原さんの書いたもの(1月15日号掲載)を読み、状況は違いますが、面白く読ませていただきました。

め94名、JICAの在外事務所や職員を含めると毎回約240件のメール配信を行っています。読者の皆さんからも激励やご意見も数多く頂戴

参考になる考え方あり、また努力なさっているのを知り、是非、同じ音楽指導者としてお話し見たいと思ひます。(エジプトSV)

専門家の方から「アハバール・カシオン18号」を読ませていただきました。特に「いいところは真似る」「シリア・乳幼児教育分野視察報告」を、興味深く読みました。今後も、ぜひ読ませていただきたいので、メールの配信をお願いします。(ヨルダンJOCV)

JICAと関係を持っているわけではありませんが、シリアは私の最も好きな国のひとつなのでニュースレターを

していますので、今回はその中からいくつかご紹介させていただきたいと思ひます。



楽しみにしております。

(中央大学総合政策学部学生)

帰国してしばらくは燃え尽き症候群(結構深刻!)にかかり、精力的にサーモンキャンペーンなどをこなしていましたが、今は音楽教員として中・高校の教壇に立つ毎日です。忘れるかな?とと思っていたアラビア語も意外と覚えていて、「たかが2年、されど2年」を実感しています。

私の中でシリアは遠い記憶になりつつありますが、こうしてメールマガジンを通じて今のシリアを身近に感じる事ができればと思ひます。

(元シリアJOCV)

We are on the WEB. See us on www.jica.go.jp, www.jicasr.org

お知らせ

本ニュースレター配信ご希望の方は当事務所まで氏名、メールアドレス、JICAとの関係(所属)を連絡願ひます。

編集後記

忙しさにかまけ、おまけにハッジ休暇が続いて今月号の発行が遅れてしまいました。お詫び申し上げます。さて、今からシリアの官公庁が金・土の週休二日制に移行しました。これが業務の効率化、消費の拡大にうまくつながるか。興味津々です。(N.T.)